

選択集通津録講読

・著者…慧雲(1730-1782)深諦院

解題…本書は玄談に自叙する如く、安永己亥(師時に五十歳)の夏、通津専徳寺に講演せる筆録なり。通津の題名即ち茲に取るか。玄談の終わりに末疏を叙して西山派に八部、鎮西派に八部、今家に五部を掲ぐ。即ち是等の諸註を咀嚼し、正すに日溪(法霖(1693-1741))昨夢(僧樸(1719-1762))二師の宗学を以ってす。特に玄談の一篇は文義優麗、他人の企及すべからざる特色を存す。

(メモ)

・安永己亥…安永八年(1779)。

※専徳寺住職は六世超応。天明二年(1782)に本堂上棟(超応75歳)

・末疏…西山派八部、鎮西派八部、真宗五部を「法霖(1693-1741)」と昨夢(僧樸(1719-1762))二師の宗学で正す。

・底本…仏大

・参照…六条法光寺本(法本)(京都市下京区東松屋町840か)

十三に多善章に三。初に標章、二に引文、三に私釈。今は初。

以念仏為止善根之文

【13】 念仏をもつて多善根となし、雑善をもつて少善根となす文。

今章の来意、上に准じて二義。もし文に約せば、上来觀經の六文すでに竟んぬ。以下小本の四文これに次ぐ。三經鼎の時は、上にすでに弁ずるがごとし。今すなわち四文中の第一なり。もし義に約せば、利益七文の中第四なり。勝劣対、大小対、多少対、もつて助顯なり。

多善章とは、あるいは(決疑)「念仏多善根篇」と云い、あるいは(大綱)「念仏多善篇」と云い、あるいは(鵜木要義)「念仏多善根章」と云い、あるいは(私集)「名号大善章」と云い、あるいは(聞香)名号多善[498a]章と云う。今すなわち略に従う。化本(二十二紙)に云く、

『弥陀經(※阿弥陀經)』にのたまはく、「少善根福德[※の因縁]をもつて、(乃至)名号を執持せよ」と。(以上) (註釈版四〇一)

また云く「極樂は無為涅槃の界なり」(註釈版四〇四)。また(二十五丁)云く「元照律師の『弥陀經の義疏』にはく、」(註釈版四〇五)等と。

問う。この文の至要、何ぞ化卷に属するや。

答う。謹んで按ずるに、この經の隱顯、『觀經』と同じ。彼は顯説に依るが故に化卷に属す。今初は隱彰なるが故に真益を嘆ずるのみ。

二に引文に二。初に小經、二に事讚。初に小經に二。初に諸行を廢す。

二に念仏を立す。今は初。

阿弥陀經止得生彼国

『阿弥陀經』にのたまはく、「少善根福德の因縁をもつて、かの国に生ずることを得べからず。

「不可」とは下のごとし。

「少善根」とは古に多説あり。しばらく旧聞によりて略して十一を挙ぐ。

一に肇法師云く、「臨終の十念に期して放逸の念を遮るための故に少と云う。小時の念仏の不定の疑を除かんがための故に多と云う」と。

二に天台処云く（略記準釈）、「用心の薄なるが故に少と云う。用心の厚なるが故に多と云う」と。

三には通讚に云く、「進退不定の念仏の故に少と云う。専心念仏の故に多と云う」と。

四には海東に云く、「諸善を少と云う。菩提心を多と云う」と。

五には狐山に云く、「散心の称名を少と云う。要期日限の称名を多と云う」と。

六には円測の疏に云く、「いまだ解説分を種えざるが故に少と云う。すでに種えるは多と云う」と。

七には仁岳の疏に云く、「散善を少と云う。定善を多と云う」と。

八には慈蔵の義記に云く、「小乗心なるが故に少と云う。大乘心なるが故に多と云う」と。

九には雲棲に云く、「菩提心の上に称名なきを少と云う。称名あるを多と云う」と。

[498b] 十には要解に云く、「二乗菩薩の善業を少善と云う。人天の福業を少福と云う。持名を多と云う」と。

十一には元照の意に、「余善を少と云う。称名を多と云う。その文に云く、

「如来、持名の功勝れたることを明かさんと欲す。まづ余善を貶して少善根とす。いはゆる布施・持戒・立寺・造像・礼誦・座禪・懺念・苦行、一切福業、もし正信なければ、回向願求するにみな少善とす。往生の因にあらず。もしこの経によりて名号を執持せば、決定して往生せん。すなはち知んぬ、称名はこれ多善根・多福德なりと。むかしこの解をなしし、人なほ遲疑しき。近く襄陽の石碑の経の本文を得て、理冥符せり。はじめて深信を懐く。かれにいはいはく、善男子・善女人、阿弥陀仏を説くを聞きて、一心にして乱れず、名号を専称せよ。称名をもつてのゆゑに、諸罪消滅す。すなはちこれ多功德・多善根・多福德因縁なり」

（註釈版四〇六）

かの石経は本梁陳の人の書。今に至りて六百余歳。ひそかに疑うに今本の相伝訛脱せり。（已上）

従上十一、初の十は不正、後一を正となす。しかれば化土巻に引く所、今と対檢せよ。余の「多功德」は四字多し。今は師説によりてこれ衍字にあらず。謂く多功德とは徳本の義、多善根は善本の義、多福德は合称なり。もつて智慧の対するものなり。かしこをもつてこれを解さば、

「少善根」とはかの善本に簡ぶ。

「少福德」とはかの徳本に簡ぶ。

「因縁」とはすなわち所以の義。余文は解すべし。

二に念仏を立すに四。初は行相を示す。二は時日を明かす。三は信体を明かす。四は益相を示す。今は初。

[499a] 舍利弗若^止執持名号

舍利弗、もし善男子・善女人ありて、阿弥陀仏を説くを聞きて、名号を執持して、

按ずるにこの一段、宗家の釈中、七処にこれを引く。

一には「玄義」の別時意門に云々。

二には「定善義」の念仏三昧証に云々。

三には「散善義」の深信釈に云々。

四には『観念法門』の護念縁に云々。

五にはまた撰生縁に云々。

六にはまた撰生縁に云々。

七には『礼讃』の後述の文に云々。

已上七処、文に具略あれども義に別途なし。一經の至節、子細これを檢す。

「善男」等とは、諸經の衆を告げる通語。宗に依りてこれを判ぜば別義なし。一には宿善に約す（『安樂集』に下々品の善知識に遇う心を判じて云う。

宿縁あるが故に）。二には法徳に約す（機はこれ悪といえども法体は善なるが故に）。

ここにまた二あり。一には頭に約す（多善の名号を受くが故に）。二は隱に約す（不可思議の功德海を得るが故に）。

「聞説」等とは、「説」に二途あり。「聞」はまた准知す。一には頭に約

す。謂くかくのごとき名号多善根多福德因縁を説く。また従いてかくのごとき説を聞くなり。二には隱に約す。謂く光寿無量を説くが故に阿弥陀と名く。これすなわち不可思議功德の利。また従いてかくのごときの説を聞くなり。

「執持名号」とは、上は信体を約し、下は信相を約す（帚録の釈好し）。また二途あり。頭はすなわち二十願成相なり。化土本（二十六紙）に狐山を引きて云く、

執はいはく執受なり、持はいはく住持なり。信力のゆゑに執受心であり、念力のゆゑに住持して忘れず。
（註釈版四〇六）

これなり。隱はすなわち十七願成相なり。化土本（十九紙）に云く、

「執」の言は心堅牢にして移転せざることを彰すなり。「持」の言は不散不失に名づくるなり。
（註釈版三九八）

等と。これ信行不離の深義を積す。今は不離の中の大行の辺を取る者なり。

[499b] 二に時日に約す。

若一日^止若七日

もしは一日、もしは二日、もしは三日、もしは四日、もしは五日、もしは六日、もしは七日、

「一日」乃至「七日」とは、綽師は別時の称念となす。宗家は長時・別時に通ず。吉水またしかなり。頭はすなわち策励の義、いわゆる急走急作、頭然を灸うがごとしはこれなり。隱はすなわち報恩大行。上尽一形とはこれなり。

三に信体を明かす

一心不乱

心を一にして乱らずは、

「一心」等とは、帚録（※阿弥陀経弊帚録か）に云く、

「一心は起行・安心の二意あり」と。黒谷（私記五紙右）に曰く、「一心不乱とは、念仏の時に心散乱せず、至誠の信心にて、専ら仏名を念ず」と。これ起行の一心を明かす。『礼讃』に言く、「乃至七日なるべし。一心に仏を称して乱れざれば」と、また同じ。また黒谷（要義問答）に大本の三信、観経の三心をもって、この一心となす。これ安心に約するなり。

高祖（化土卷）また「自利の一心を励まして」と言うは、安心に約して起行を明かす。「励」の言は起行を示すが故に。これ顕の義に約す。けだし按ずるに自力の念仏とは、安心また起行に属す（与中輩菩提心通二義者一般）。心は修習徳本の心に住むが故に。他力の念仏とは、起行また安心に属するべし。すなわち信所具の行なるが故に。故に今家（改邪鈔）は起行作業を明かして方便となす。唯々安心を正因となす。しかしてこの名を廃捨するにあらず。いまし報謝大行の名となすなり。故に彰の義ただ安心となす。（已上）

この釈允当なり。知るべし、この一心の顕はすなわち自利の一心 [500a] の隠、すなわち利他の一心。上に准じて知るべし。化土本（十五紙）に云く、

『大経』には「信樂」とのたまへり、如来の誓願、疑蓋雑はることなきがゆゑに信とのたまへるなり。『観経』には「深信（※心）」と説けり、諸機の浅信に対せるがゆゑに深とのたまへるなり。『小本』には「一心」とのたまへり、二行雑はることなきがゆゑに一とのたまへるなり。

（註釈版三九三）

等と。また略書に云く、

執持はすなはち一心なり、一心はすなはち信心なり。（註釈版四九五）

等と。隱意に約するものなり。

「不乱」とは、頭はすなわち勸の相を策励す。隠はすなわち他の雑縁なし。帚録は合離釈を甚好となす（合はすなわち仏智金剛心。初後不二。離はすなわち一心これ体。上に説く所のごときは不乱これ相。内に在りて乱れず、よく行者をして相続不断せしむるこれ用なり）

四に益相を示す

其人臨^止極樂国土

その人命終の時に臨みて、阿弥陀仏もろの聖衆と現じて、その前にまします。この人終時に心顛倒せずして、すなはち阿弥陀仏の極樂国土に往生することを得」と。

「その人」とは、頭はすなわち不定聚の機。隠はすなわち正定聚の機。

「臨命」等とは、頭はすなわち正修、隠はすなわち臨平。いかんが平に通ず。信受本願前念命終、即得往生後念即生なるが故に。

「阿弥陀」等とは、来迎の相なり。

問う。来迎の仏は、真となすや化となすや。

答う。機の所見を顕せば化となす。機の所見を隠せば真となす。来にして不来、不来にして来。仏に真化なし。真化は機に在るものなり。

原その三機はみな来迎あり。ただ機の期と不期とを異となすのみ。しかれば期の意に二あり。一には業の成不を恐れるが故に。二には死の障縁を怖れるが故に。迎にまた二意あり。一に品業優降なるが故に。二に生死の難を守るが故に。弘願の行人、四義すべてなし。一に平生業成なるが故に。二に死縁を簡ばざるが故に。三に同一念仏なるが故に。四に光明常護なるが故に。しかして来迎あるは自然の妙益なり。

もししかれば来迎の益は専ら諸[500b]行に属するはいかん。

答う、十九願の機法ともにこれ定散。故に上の四義あり。二十願のごときは、法すでに定散を離るも、機なお封執を存し、また四義あり。故に諸行の類なり。旨を得てこれに領く。

「与諸」等とは、事讚に云々。次下の釈のごとし。

「現在」等とは、次上の釈のごとし。

「心不」等とは、頭すなわち心相、隠すなわち心体。

「即得」等とは隠顕臨平あり。上に准じてこれを解す。

二に事讚に三。初に廢立を的明す。二に時の長短を明かす。三に利益相を明かす。今は初。

善導釈此止專復專

善導この文を釈していはく（法事讚・下）、

「極樂無為涅槃の界には、縁に随ふ雜善はおそらくは生じがたし。ゆゑに如来（釈尊）、要法を選びて、教へて弥陀を念ぜしむること專にしてまた專ならしむ。

「極樂」とは、いわゆる但受諸樂なるが故に極樂と名く。

「無為」とはすなわち自然の義。淨土の因果、依正主伴、一切自然なるが故に。

「涅槃界」とは、いわゆる光壽無量なるが故に阿弥陀と名く。この妙果を名けて無上涅槃となす。あに止まん仏（※豈止仏…仏どころか）、聖衆またしかり。經に「及びその人民」と云うが故に。あに止まん正報、依報またしかり。讚に「涅槃莊嚴処々満」と云うが故に。

「随縁」等とは、正しく次上の「不可以少善根」等の文意を括る。法要二（五十二紙）の『唯信鈔文意』に云々（「随縁雜善恐難生」といふは、「隨縁」は衆生のおのおの縁にしたがひて、おのおののところにまかせて、もろもろの善を修するを極樂に回向するなり。すなはち八万四千の法門なり。これはみな自力の善根なるゆゑに、実報土には生れずときらはるるゆゑに「恐難（※恐難生）」といへり）。

西鎮兩家、水火相激にして各おの異あり。二機同生は、本願の功を没す（これ鎮西の失）、一機唯生は、二願徒設（これ西山の失）。故に今家の意に謂く、因に二力あり、果に二土あり。願願に[501a]功あり。本願最勝なり。旨を得てこれに領く。左右塞なし。

「故便」等とは、「專復專」に二義あり。一に正行正業。この義は隠顕に通ず。顕はすなわち真門、なお定專散專のごとし。定散の雜心等を失するが故に。隠はすなわち弘願の意。次下に云々（「教念弥陀專復專」といふは、「教」はをしふといふ、のりといふ、釈尊の教勅なり。（乃至）「專復專」

といふは、はじめの「専」は一行を修すべしとなり。「復」はまたといふ、かさぬといふ。しかれば、また「専」といふは一心なれとなり、一行一心をもつばならねとなり等（註釈版七一）は全くこの旨なり。また法要九（三十七丁）の『安心決定鈔』に云々（専の字、二重なり。まづ雑行をすてて正行をとる、これ一重の専なり。そのうへに助業をさしおきて正定業になりかへる、また一重の専なり等）は今の前義と合す。また次下に云々（またはじめの専は一行なり、のちの専は一心なり、一行一心なるを「専復専」といふなり（註釈版一四〇四））は今の後義と合す。隠頭の宗趣、ここにおいて分つ。

二に時の長短を明かす

七日七夜^止倍皆然

（七日七夜、心無間なれ。長時に行を起すもますますみなしかなり。）

「七日」等とは、これ別時方法に約す。

「心無間」とはすなわち無間修なり。

「長時」等とは、これ長時に約す。また長時修は上の「専復専」に通ず。すなわち無余なり。恭敬は易行品のいわゆる「恭敬心執持」（真聖全一・二五四）はこれなり。自力を恃む人、何ぞ専専を得ん。その専専せざるはすなわち本願を軽慢する者なり。これ故に専専とは無余にして成す。真の恭敬なり。隠頭の二意、准じて釈し知る事とす。

三に利益相を明かすに二。初に臨終、二に生後。今は初。

臨終聖衆^止坐金蓮

（終りに臨みて聖衆、華をもちて現じたまふ。身心踊躍して金蓮に坐す。）

「持華」等とは、上上品の相に寄説する【501b】なり。

二に生後

坐時即得^止入三賢

(坐する時にすなはち無生忍を得。一念に迎へ將て仏前に至る。法侶衣をもつて競ひ来りて着す。不退を証得して三賢に入る)と。

「無生忍」とは、また上上品の相に寄説するなり。通途・不共の隱頭を知るべし。

「法侶」等とは、初生入会の相。ひろく舟讚のごとし。けだし定中の所見なり。

「不退三賢」の通途不共、隱頭知るべし。

三に私積に三。初に経積の義を合す。三(※二)に多少の義を積す。三に兼ねて余意を示す。今は初。

私云不可^止恐難生

(わたくしにいはく、「少善根福德の因縁をもつて、かの国に生ずることを得べからず」といふは、諸余の雜行はかの国に生じがたし。ゆゑに「隨縁雜善恐難生」といふ。)

上に准じて解すべし。

二に多少の義を積すに二。初に多少の合積、二に別して多善を解す。今は初。

少善根者^止多善根也

(少善根とは多善根に対する言なり。しかればすなはち雜善はこれ少善根なり、念仏はこれ多善根なり。)

いわゆる多少対なり。

二に別して多善を解す。

故龍舒淨土^止二十一字

(ゆゑに龍舒の『浄土文』にはく、「襄陽の石に『阿弥陀経』を刻れり。すなはち隋の陳仁稜が書けるところの字画、清婉にして人多く慕ひ玩ぶ。一心不乱)より下に、(専持名号以称名故諸罪消滅即是多善根福德因縁)といふ。今世の伝本にこの二十一字を脱せり」と。(以上))

「龍舒」等とは、龍舒は処名。姓は王、名は日休。字は処中。伝は『蓮宗宝鑑』四、『仏祖統紀』二十九、『雲棲往生集』等に出づ。統紀二十九に云く、

王日休は龍舒の人。国学の進士となりて、六経訓伝数十言(※萬言)を著す。一旦これを捐てて曰く。「これみな業習、究竟法にあらず。吾その西方の師(※歸)のために、すなわち布衣蔬食す」と。惟仏是念すること、日課千[502a]拜し、夜分いまし寝ん。嘗みに浄土文十巻となす。(大正四九・二八四上)

等と。今之所引は第一巻に出づ。

「襄陽」等とは靈芝(※元照)また石本を引ききて証となす。上に已に引くがごとし。しかるに義疏(※阿弥陀経義疏)に云く、「梁の陳人の書」(大正蔵三七・三六一下)と。今云く「隋唐の仁稜」と。また『萬姓統譜』十八(九紙)に云く、

「隋唐の仁稜、字は書威、少驍勇。大業中(庚午六年)琉球国を撃ち、その小王を斬る。觀(※歡)斯老摸(※?)」。

(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2575737?tocOpened=1>)



『聞持記』に云く、

梁陳はいまし南朝両国の名。朝散郎の陳仁稜の書碑、襄陽の龍興寺本朝

殿にあり。撰は李公、諱は友聞、字は季益。嘗て彼に守官し、この経を持す。錢唐に帰し、疏主これを得て喜び自勝せず。遂にまた石を刊行し靈芝大殿の後に立つ。続いて兵火によって焚毀し悲失す。逆に梁陳を推し晋を去りていまだ遠からず。驗に真を得るべし。今本すでに六百余歳を経る。中間の伝写、訛脱知るべし（近く石経を筑の宗像において得て刊行する者あり。具さにかの序のごとし。」）

「龍舒靈芝および戒度」等は、みな石経に依る。吉水これを引く。宗祖また然るなり。謂うべし、千載一希なる奇の事。然るに雲棲これを議して云く、「一心不乱」の下、ある本に「專持名号」二十一字を加う。今用いざる所、文義の不安をもつての故に。なお古本に依りて加えず。しかるにすなわちこれ多善根の意をもつて言外に補入し、ここに充当せんとす。「文義不安」とは、上文すでに「執持名号」の四字ありて、更に專持名号の一句を著すべからず。上下重複し、文義を成ぜず。旧伝のこの二十一字、これ襄陽の石刻。まさに知るべし、これ前人解経の語。襄本訛は正本を入れる。混書は別せずのみ。文義を善とするはまさに自ら見得すべし。【502b】の義ありといえども、われ従うことあたわず。従上諸師は伝承せらるる故に。しばらく化巻の所引に依る。上は執持名号の四字なし。何ぞ重複これあらん（宗像の伝うる所の石本の余に貯える所なり。これに先んじて電覽は意をここに置かず。今講は具せざる故に対檢に及ばず。他日の対檢、すなわち必ず燎然か）。余文解すべし。

三に兼ねて余意を示すに三。初に大小の義、二に勝劣の義、三に結。今は初。

非啻有多^止大善根也

（ただ多少の義あるのみにあらず。また大小の義あり。いはく雜善はこれ小善根なり、念仏はこれ大善根なり。）

いわゆる大小対なり。

二に勝劣の義

亦有勝劣^止勝善根也

(また勝劣の義あり。いはく雑善はこれ劣の善根なり、念仏はこれ勝の善根なり。)

いわゆる大小対なり。

三に結

其義応知

(その義知るべし。)

大論三に云く、

梵に摩訶と云う。秦に大と言う。あるいは多、あるいは勝。

(大正二五・七九中)

今また准じて解す。称讚経に云く、

我れ今無量寿仏の不可思議なる仏土の功德を称揚し讚歎するがごとく

(浄真全一・三九二)

無量故に多、無辺故に大、不可思議なる仏土功德故に勝なり。

問う。文に仏土と云うは何ぞ牽合するや。

答う。依正不二。首題をもつて例となすべきのみ。

【科段⑧ (随文釈)】

十三に多善章

標章

引文

小経

諸行を廃す

念仏を立す

行相を示す

時日を明かす

信体を明かす

益相を示す

事讚

廢立を的明す

時の長短を明かす

利益相を明かす

臨終

生後

私積

經の釈義を合す

多少の義を積す

多少の合積

別して多善を解す

兼ねて余意を示す。

大小の義

勝劣の義

結

十四に証誠章

六方恒沙^止念仏之文

【14】 六方恒沙の諸仏余行を証誠せず、ただ念仏を証誠したまふ文。

今章の来意、上に准じて二義。もし文に約すれば、小本四文中の第二なり。もし義に約すれば、利益七文中の第五なり。証不証対をもって助顯するのみ。

「証誠章」とは、あるいは（決疑）「六方諸仏唯【503a】証誠念仏篇」と云い、あるいは（大綱）「証誠念仏篇」と云い、あるいは（鶉木）「念仏証誠

章」と云い、あるいは（要解）「証誠念仏章」と云い、あるいは（聞香）「諸
仏証誠章」と云い、あるいは（私集）「証誠章」と云う。今また略に従う。

「証」とは『字彙』には「驗なり」。「誠」とは、「無為なり。信なり」と。
謂く、証驗してもって信ずべきを挙ぐるなり。行卷（二十三右）に、

また『弥陀経』にいふがごとし。へもし衆生ありて、阿弥陀仏を説くを
聞きて、（乃至）まさに願を發し、かの国に生ぜんと願ずべし」と。次
下に説きていはく、へ東方の如恒河沙等の諸仏、南西北方および上下一
々の方に恒河沙等の諸仏のごとき、おのおの本国にしてその舌相を出し
て、あまねく三千大千世界に覆ひて誠実の言を説きたまはく、へ「なんだ
ち衆生、みなこの一切諸仏の護念したまふところの経を信ずべし」と。

（註釈版一六七）

等と。また化土本（二十三紙右）に云く、

「また決定して、『弥陀経』のなかに、十方恒沙の諸仏、一切凡夫を証
勸して決定して生ずることを得と深信せよと。」（註釈版四〇二）

- 15 -

等と。また（二十三紙左）云く、

次下の文にいはく、十方におのおの恒河沙等の諸仏ましまして、同じく
釈迦を讃めたまはく、
（註釈版四〇二）

等と。また（二十四紙右）云く、

また十方仏等、衆生の釈迦一仏の所説を信ぜざらんことをおそれて、す
なはちともに同心・同時におのおの舌相を出して、あまねく三千世界に
覆ひて誠実のを説きたまはく、へ「なんだち衆生、（乃至）かならず疑な
きなり」と。
（註釈版四〇二）

問う。証誠の相は顕となすや、隠となすや。

答う。義は隠顕に通ず。上に准じて解すべし。

問う。禿鈔に云く、「『小経』に、勸信に二、証誠に二、護念に二、讚嘆

に二、難易に二あり」（註釈版五〇四）等と。いかんが思念せん。答う。これはこれ至要なり。試みに大綱にて解す。

「釈迦に二」とは、一は自証知見をもって勧む。文に「我是利」等と云うこれなり。二に他方の仏説を引きて勧む。文に「如我今 [503b] 者讚歎阿弥陀仏」等と云う意これなり。

「諸仏に二」とは、釈迦に准解す。地を易えて各おの主なるが故に。これはこれ総なり。次下は別となす。

「証誠に二」とは、「功德」は因に約し、「往生」は果に約す。隠頭の四重、応のごとく知るべし。

「護念に二」とは、「執持」は行に約し、「発願」は信に約す。別に「釈迦」に属し、「諸仏」は何。能説の主は行、能証の主は信、これを異となすのみ。理実の二は各おの「二は」に通ずるなり。

「讚歎に二」とは、文に「如我今者讚歎阿弥陀仏不可思議功德」と云う（これ一）。また「如我今者称讚諸仏不可思議」と云う（これ二）なり。

「諸仏讚歎に二」とは、経に「東方亦有」等と云う（これ三）。また「彼諸仏等亦称説（一本は讚と作す）我不可思議功德」等と云うこれなり。

「難易に二」とは化土の本（三十紙左）に依りて云う。

大信海（※大信心海）ははなはだもつて入りがたし、仏力より発起するがゆゑに（易入と言わず、しかして叵入と曰う。所説は無宿善の機驕慢懈怠疑情閉塞なるが故なり。故に「難は疑情」と云う。謂く、そのもつて難き所とは、疑情をもつて閉塞するが故なり。知るべし）。真実の樂邦はなはだもつて行き易し、願力によりてすなはち生ずるがゆゑなり（かの願力に乗じて定めて往生を得るが故に。「易は信心」と云うは謂く、その謂う所の易とは、「乗彼願力」をもつてなり。知るべし）。

（註釈版三九八）

今この文をもつてかの註脚を備える。文義明了なり。また信卷（初）に云く、

無上妙果の成じがたきにあらず、真実の信樂まことに獲ること難し。

（註釈版二一一）

今謂く、信心すでに具す。妙果得やすし。またこれ同義。これはこの勸信誠疑の功なり。けだし証護念のもつて起こす所なり。

「執持に三」とは、三世常恒の化益無尽を明かすなり。經に「已發願今發願當發願」と云い、また「已往生今往生當往生」と云う。■益合釈は謂うべき深解。今意の謂い。

「發願すでに三」とは、執持にまた三。しかして執事(※執持か)は行に約す。發[504a]願は信に約す。かくのごとき行信は三世諸仏の出世の本意なるものなり。また按ずるに總序は小本の宗致を述べて云く、

円融至徳の嘉号は悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信樂は疑を除き証を獲しむる真理なりと。(註釈版一三一)

これまた至玄。因は略してこれを解せば、次上の文に、「難思の弘誓は(乃至)慧日なり」と云う。これ大經の意。すなわち光寿二徳。寿は生死を度し、光は無明を滅す。安樂自然の妙果はまたこれ十方撰化の根本。これを名号に撰す。聞信して受生す。これよりして成ず。真宗の教証、具足せざることなし。語の龍天を取りて巧妙見るべし。

次の文に、「淨邦縁熟して(乃至)逆謗闡提を恵まんと欲す」とは、これ觀經の意。上はすなわち法実、下はすなわち機実。註脚を労わず。三經和讃併会して解すべし。

次はすなわち今文にして、合説機法、諸仏の証誠、勸信誠疑の旨を明かすなり。解せば云く、「円融至徳」とは、三仏同じく不可思議功德に入るが故に。「嘉号」とは、正しくこれ大行。「転悪」とは、「転」とは謂く転滅、「悪」とはいわゆる五濁悪世の悪なり。「成徳」とは、「成」は謂く成就、「徳」はいわゆる光寿無量故に名けて阿弥陀の不可思議功德の徳なり。「正智」とは、仏智乃至勝智所成なるが故に。「難信金剛」とは、極難信法・金剛の一心の義なり。「信樂」とは、正にこれ大信。願文と無二を顕す故に信樂と云う。「除疑」とは、証誠。「獲証」とは、皆得不退轉於阿耨菩提。「真理」とは、真如一実の信海を顕すなり。

乃至次下の結は云く、「専らこの行に奉え(すなわち今は嘉号)、ただこの信を崇めよ(すなわち今は信樂)」と。また「適得(※遇獲)行信」等と

云い、また [505b] 結に「慶所聞嘆所獲」等と云う。

次の如く行信の脈絡貫通す。この中「円融」等とは、今は（※愚禿鈔の）讚嘆の義。「嘉号」とは執持。「転悪」とは功德。「難信」等とは難易。「除疑」とは勸信。獲証とは往生なり。応のごとくこれを思え。

二に引文に六。初に観念法門、二に礼讚、三に同讚、四に觀經疏、五に法事讚、六に五会讚。初の観念法門に二。初に經の説相に約す。二に宗家の助成。初の經の説相に約すに三。初に証誠の相を明かす、二に所証の行を明かす、三に所証の益を明かす。今は初。

善導観念止説誠実言

（善導の『観念法門』にはく、「また『弥陀經』にのたまふがごとし。〔六方におのおの恒河沙等の諸仏ましまして、みな舌を舒べてあまねく三千世界に覆ひて、誠実の言を説きたまふ。〕

五種の増上縁の中、証生増上縁の文なり。まさにこの文を積すべし。略して二門を作る。一は大意、二は別積。

初の大意とは、これまた四となす。初は証誠の所以を明かし、二に転引と同時に弁じ、三に新旧の広略を弁じ、四に中央の方域を弁じ。

初の証誠の所以を明かすとは、また四由あり。初に内人の疑惑を対治せんがための故に。二に悲願の成就を述成せんがための故に。三に兼ねて聖道の難証を示さんがための故に。四に浄土の易行を反顕せんがための故に（この四、初一は被機、次一は顕法、後二は約機法並顕）。

初の内人の疑惑を対治せんがための故とは、和讚に云々（十方恒沙の諸仏は、乃至証誠護念せしめたり）。もし外法に対せば、内法信じ難し。これ一重となす。内法中について、もし聖道に対せば、浄土信じ難し。これ二重となす。故に極難と云う。今の証誠のごときは、まったく内人となす。もし外人に対せば却って幻術妖怪の事となす。徒に疑謗を増し、何ぞ [506a] 内人を信受すること不在せんや。もと諸仏の神力、誠言虚しからざるを信ず。見聞かくのごとし。丁重希奇証誠、あに往生の大益を深信せざるかな。和讚の旨それここにあるか。

二に悲願の成就を述成せんがための故とは、和讚（云々）（諸仏の護念証

誠は、(乃至) 弥陀の大恩報ずべし)。また法要二(三十九左)の文意(云々)(第十七の願に、十方無量の諸仏に、わがなをほめられとなえられんとちかいたまえる一乗大智海の誓願を成就したまえるによりてなりと。弥陀經の証誠護念のありさまにてあきらかなり等)。

已上二証の祖意見るべし。解釈を労わず。

三に兼ねて聖道の難証を示さんがための故とは、和讃(云々)(十方恒沙の諸仏の(乃至)かなはぬほどはしりぬべし)。極重悪人は他の方便なし。ここをもつて諸仏の大悲この経を説くに至りて、森然証誠、もし他方に広とすべきことあらば、何ぞ独りこの法において、かくのごとく丁重深切なるや。故に知んぬ、証誠は兼ねて聖道の難証を示すものなり。

四に浄土の易行を反顕せんがための故とは、和讃(云々)(眞実信心うることは(乃至)えがたきほどをあらわせり)聖道の法門は信じ易く行じ難し。浄土はこれ反して行じ易く信じ難し。今難信を挙げてもつて行の易きを顕すものなり(聖浄決に云く、聖道は信は易にして行は難。浄土は行は易にして信は難。学則に云く、讚難信とは、修し易きを証する所以なり。これらの文意、今と吻合す。これを思え)。

二に転引と同時に弁ずるとは、古に二説あり。一に云く、転引(駕説三の二十二紙)、一に云く、同時(彈憚改二の四十二紙)。今謂く、後義を是となす。大本に云く、

そのとき阿難、すなはち無量寿仏を見たてまつるに、威徳巍巍々として、須弥山王の高くして、一切のもろもろの世界の上に出づるがごとし。相好(より放つ)光明の照曜せざることなし。この会の四衆、一時にごとく見たてまつる。
(註釈版七五)

また『莊嚴經』下(六紙)に云く、

阿難、(※省略…すなわち座より立ちて合掌し、西に面して頂礼するの間に、忽然として)極楽世界の無量寿仏を見ることを得る。(一・二三六)

また「十方世界の諸仏(※諸仏如来)の無量[505b]寿仏の(※省略…種々の)功德を称讚(※称揚讚歎)したまふを聞けり」(一・二三七)と。また云く、

東方に恒河沙種の世界あり。諸仏如来広長の舌相を出し、無量の光を放ち誠実の言を説きて無量寿仏の不可思議の功德を称讚したまふ。

(一・二三一)

等と。これらの説に准じて、今また冥然す。もし爾らば何ぞ不分明の説となす。この経をもつて経家の語なきが故に。説相は不分明なるのみ。しかりといえども文に「如機今者」と云い、また「亦有前後」と云う。彼此を映顯して互いに准じ、義自ら分明なり。

三に新旧の広略を弁ずれば、新は「十方」と云う。旧は「六方」と云う（義要下末の三紙）。云く、「東方は東南を撰める。南方は西南を撰める。これ新本の列次に依る。また可。二方分位等」と。

問う。何故来証せず。

答う。来たらずして還りて勝る。譬えば郷祭来往、国祭各処のごとし（帚録の意）。

四に中央方を弁ずとは、古に二説あり（略記の意）。一に云く此土、一に云く極樂。今謂く、正しく此土に約す。理宜しくしかるべきが故に。十方世界は所説の処をもつて中央となすなり。

また大本に云く、「東方諸仏国（乃至）往觀無量覺」等と。もしこの文に准ずれば、兼ねて極樂に約す。また妨ぐべからず。大意ほぼしかり。

二に別釈とは、「六方」と云うは、総撰これを言う。「恒河沙」とは、なおこれ近言。雲棲に云く、

恒河は西域の無熱池の側にあり。香山の頂上に無熱池あり。四河を流出する。恒河は南にあり。広さ四十里、沙は水を逐い流る。至りて微細となす。仏はかの河の近づきて説法するが故に。およそ多を言わば常に取りて喩となす（已上）。

広くは域記の慈恩伝等のごとし。

「舒舌」と言うは、すなわち広長舌の具相の随一なり。『觀仏三昧經』第三のごとく（四紙）広くその相を説く。華嚴四十八【506a】（六紙右）及び五十七（十四紙左）には十種の舌を説く。瓔珞經五（二紙右）には十四種の

徳を説く等。また菩薩の舌相は華嚴二十一に出づ（十三紙右）。その因を論ぜば、瑜伽四十九（七紙已下）等のごとし。総じて三十二相の行因を説けば、舌相の因とは、大集経六（十四紙）に云く、「口の四過を護るが故に広長舌相を得る」と。悲華経一（二十紙）・涅槃二十九（四紙右）・無上依経下（四紙右）・優婆夷法門経（九紙左）・大法炬経四（七紙右）等、往々これを説く。

「またこれを出だす」とは、大論（第八の二紙）に婆羅門が仏に白して言く、「もし人の舌が鼻を覆えば、言いて虚妄せず。何ぞ況んや髪除をや」と。また按報恩経七（十三紙）・因果経一（二十三紙）・大般若経三百八十一（五紙）宝女所問経四（三十二相品）勝天王般若経七（八紙）・大莊嚴経三（二十紙）・坐禅三昧経上（二十四紙）・仏本行集経九（三紙）・優愍塞戒経一（十八紙）・大毘婆沙一百七十七（二紙）・賢劫経五（三十二相品）・中阿含十一（四紙）・長阿含一（十九）・菩薩善戒経九（八紙）・智論四（十八）及び八十八（二十二紙）・十住毘婆沙論八（十九紙）・文句二十三（二十紙）。従上の所説、しばしば開合の積あり。具さに略して前後の入出、概論すべからず。これを要すれば大同小異のものなり。帝録（下三十七紙）にまた云く、「私は師説（未詳何人。金津・卞閔師、博聞をもつて名く。あにこの人か）に依る」と。正しく自証他証、舒舌不舒、一仏多仏の別あり。釈迦は舒舌なくして自証すれば群経を散在す。

今自ら舒舌し自証を明かすは、大論（第八二紙・第七十九の二十九紙等）及び仏説心明経（六紙右）のごとし。説きて女人を度して婆羅門に示す。

「舌は面門を覆う」とは、一機に趣く[506b]なり。また『悲華経』一（二十八紙右）に曰く、

妄語両舌悪口綺語を遠離しす。この故に今我この舌相を得る。善男子、この因縁をもつての故に、諸仏世尊所説の眞実、虚妄せざることなし。
（乃至）広長の舌相を出し、徧く面門を覆う。その舌根に従い六十億の光明を放つ。その光微妙にして、徧く三千大千世界を照らす。

等と。『第一義法輪経』（十三紙左）、また『僊人問疑経』（十五紙左）にまた言く、「徧く己面を覆うなり」と。『宝雨経』六（十六紙）・『勝天王般若経』第二（二十五紙）等、「舌を舒べその大衆一会を覆う」と説く。これら

の放光、利益広きと雖も、舒舌相狭し。『法華経』（第六の十八紙）神力品のごときは、「出舌相」と説く。「上は梵天に至る」とは、その相の高きを示す。『大品般若序品不退転法輪経』三（七紙右）・『菩薩念仏三昧経』（七紙）・『序品済諸方等覚経』（二紙右）・『大乘方広総持経』（二紙右）等の説相は、徧く三千大千世界を覆う。これ舒舌の至広。また菩薩瓔珞五（初）・『十住断結経』十二（十五紙左）・『菩薩処胎経』第三（十四紙右）等は、ただ舌相の放光を説き、舒舌を説かず。かくのごとく諸説自由にして（※原文・自。由_レ是）、これ釈迦自証の義あり。

次に他仏の証明を明かせば、あるいは他仏来現に舒舌を須みず。『菩薩瓔珞経』識略品（第四の十二紙）・法相品（第十七の七紙）は「十方の十仏の土に來現す」と。『金光明経』（第一の九紙）は「四仏」、『大集経』（三十一の十二紙）は「十仏等ここに來至す」と説く。故に必ず応に兼ねて証明の意あるべし。また『如来師子吼経』（十四紙左）のごときは、「北方歡喜世界法上如来、かしこにおいて舒舌大千海を覆いて証[507a]明し、もつてこの土の勝積菩薩を示す」と説く。また『五千五百仏名経』（第四九紙右）の説は「如来の舌相徧く三千を覆いて香明す」と。これらはここに來たらずといえども、その舌の舒ばすにおいて証の義あり。また因願によるが故に、その経を証明せんがためにその會に來現することあり。『宝楼閣善住陀羅尼経』（序品三紙已下）の三仏湧出、『法華経』宝浄世界多宝如来（第四の十八紙）の塔廟湧出、これら舒舌なきといえども來証を要となす。別願あるが故に、諸仏を俱せず、ただこれ一仏等なり。娑界の諸仏は同心同証にして、舒舌の勝相を同現するとは、独り今の経のみ。諸仏その因願なく、弥陀還りて悲願成就あり。この故に高祖讚じて曰く、「金剛心をえんひとは 弥陀の大恩報ずべし」（註釈版五七一）なりと（已上）。善いかなこの説。涉獵甚勤、祖讚に結歸し、用意最深なるが故に、繁を厭わず引く。後人に告ぐるのみ。

「徧覆」等とは、

- ・言葉の補足説明は、(※〴〵)
- ・言葉の補筆は、「※〴〵」
- ・引文に省略がある場合は、(※省略…〴〵)
- ・引文が原本と異なる場合、(※原本…〴〵)
- ・省略記号
- 真聖全…真宗聖教全書
- 註釈版…浄土真宗聖典註釈版
- 浄真全…浄土真宗全書
- 大正…大正新脩大蔵経

【更新履歴】 (以上、[506b]まで、令和五年一月二十日)

(次回、令和五年二月十日更新予定)

※毎回、一頁半の書き下し。

【科段⑧ (随文釈)】

十三に証誠章

標章

引文

観念法門

経の説相に約す

証誠の相を明かす

所証の行を明かす

所証の益を明かす

宗家の助成

札讃

同讃

観経疏

法事讃

五会讃

私釈